

# 漁 況 海 況 予 報 事 業

安達二郎・由木雄一・北沢博夫

沿岸沖合漁業に関する漁況と海況とを調査研究し、その結果にもとづいて作製された速報ならびに予報を正確迅速に広報普及し、漁業経営の安定に寄与することを目的とする。

## 実 施 概 要

### 1. 海洋観測の種類と実施月 (付表に海洋観測記録及び卵稚仔査定結果を示す)

観測年月日	調査名	観測点	調査員
57. 4. 5～8	沿岸定線調査	35※	由木
57. 5. 7～9	沿岸定線調査	35※	伊藤
57. 8. 3～5	沖合定線調査	20	由木
57. 9. 1～4	漁場一斉調査	33	安達
57. 10. 5～7	沿岸定線調査	20	北沢
57. 11. 3～5	沿岸定線調査	20	由木
58. 2. 28～3. 2	沿岸定線調査	26※※	北沢

※補間点15点を含む  
 ※※補間点を含むが、  
 荒天の為 St18以降  
 欠測

水温・塩分検定：由木  
 卵稚仔同定：北沢  
 生物調査：安達

### 2. 観測定線 図1に示す。

### 3. 調査項目

観測層 0, 10, 20, 30, 50, 75, 100, 150, 200, 300m

観測項目 水温, 塩分, 卵稚仔, 気象, 海象, 魚群量調査, 釣獲試験

### 4. 調査船, 観測機器

調査船 島根丸 (139.06t, 770馬力)

観測機器 STD, DBT (新日本気象海洋KK) 電気温度計 (水温, 気温2点式)  
 測深機 (油圧式 3.7馬力 1500m) 音響測深機 (28+200KHZ)

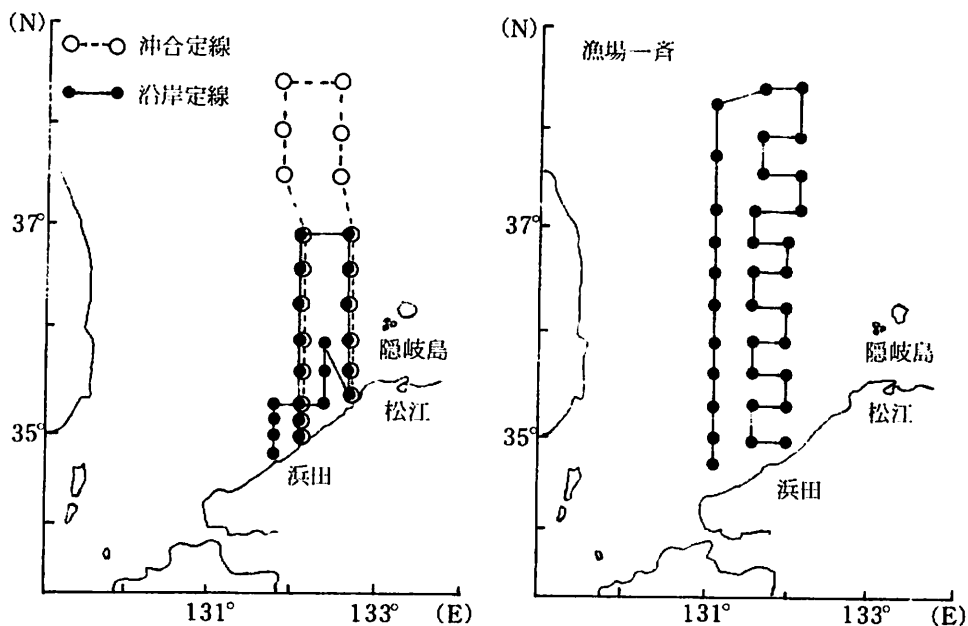


図1. 観測定線

## 結 果

### 1. 海 況

昭和57年度の日本海の海況経過の概略は次のようであった。対馬暖流域の表面および50m層水温は、4～7月は平年並～平年よりやや高めであったが、9、10月には平年よりやや低め～ところによりかなり低めのところもみられた。11月には平年並に回復し、12月以降は能登以西ではほぼ平年並、以東では平年よりやや高めに経過していた。また、極前線は全般的に4～9月は平年よりやや本土寄り、10月以降はほぼ平年並の位置に形成されていたが、大和海盆、対馬海盆付近の海域では平年よりかなり南偏していた。

一方、島根県の沿岸および沖合の海況の経過は次のようであった。図2は島根県沿岸の上層(10m)の水温と塩分の経月変化をそれぞれ示したものである。これによると、水温は4、5月は平年よりやや低めに推移していたが、6月には平年よりやや高めとなり6月中旬をピークに7月上旬まで平年より高めの水温が続いた。8月上旬にやや低めとなったが下旬にはほぼ平年並となった。9、10月は平年よりやや低めとなったが、11月以降は平年並～平年よりやや高めとなっていた。塩分は4、5月が平年よりやや低め程度の他はほぼ全般的に平年並の経過であった。

図3は各観測月の50m層の水温分布を示したものである。これによると、各観測月の海況の特徴は次のようであった。

4月：沿岸では各層とも平年よりやや低めとなっていたが、沖合では平年並～平年よりやや高

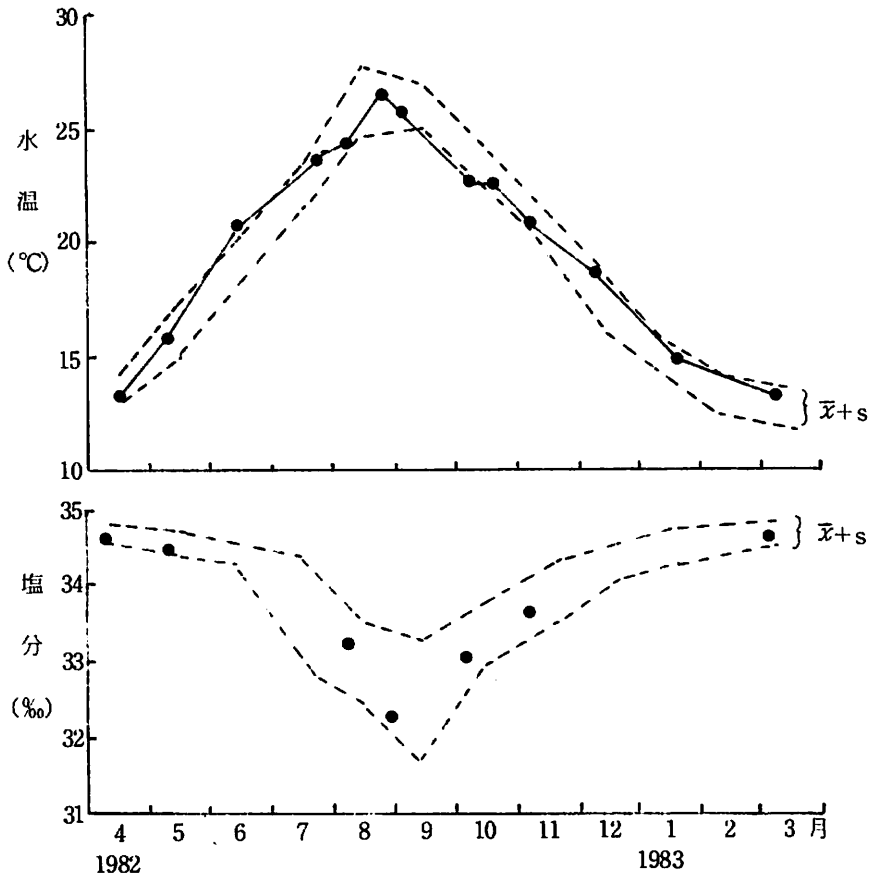


図2. 浜田沖 (35-10N, 132-00E)の水温・塩分経月変化(10m層)

めとなっていた。距岸50~80マイルを中心に東西に帯状に平年より高めの海域がみられた。

5月：浜田沖約70マイルの中・下層を中心に冷水域がみられたが、沿岸、沖合ともほぼ平年並の水温となっていた。

8月：沿岸は各層とも平年より低めの水温度となっていた。沖合は隠岐島の北側で冷水域が、南側で暖水域がみられたが、全体的にはほぼ平年並の水温度であった。

9月：浜田沖約70マイルと隠岐島NW20マイルの100m層を中心に冷水域がみられ、その周辺で平年よりやや低めの他は全体的にはほぼ平年並の水温度となっていた。

10月：沿岸から沖合にかけて各層とも平年よりやや低めの水温度となっていた。特に浜田沖約30~60マイルの中下層を中心に冷水域がみられ、その周辺では平年より低めの水温度となっていた。

11月：沿岸の水温度は上中層が平年よりやや高め、下層がほぼ平年並となっていた。一方、沖合は上層が平年並、中下層は東部で平年並となっていたが浜田沖約70~100マイルの中下層を中心に冷水域がみられ、西部では平年より低めとなっていた。

3月：沿岸では各層ともほぼ平年並の水温となっていた。沖合は上層が平年よりやや高め、中下層はほぼ平年並となっていた。全体的にはほぼ平年並の水温であった。

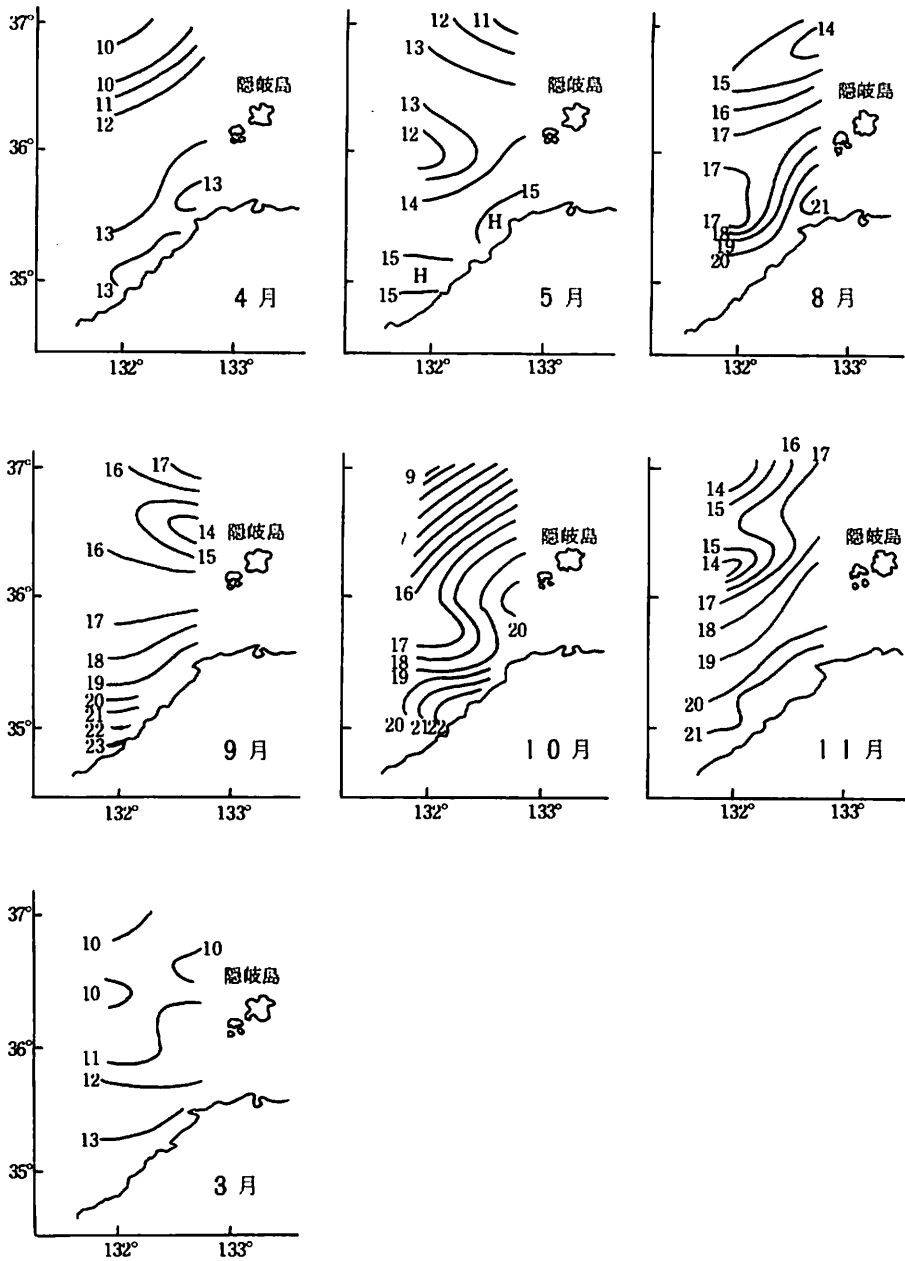


図3. 各観測月の50m層における水温分布

## 2. 漁 況

### 2-1. 浜田港の巾着網漁業の概要

浜田港には8統の和船巾着網漁船があり、この統数は過去20年間、変っていない。巾着船1統の構成は網船（無動力船）2隻、灯船3隻、運搬船2隻である。巾着船は夕方出漁し、翌日の朝方に帰港という1晩操業である。漁獲量は過去10年間の年平均漁獲量が約4万5千トン、最高は昭和51年の約6万2千トン、最低は昭和53年の約3万6千トンである。浜田港の漁獲量は各魚種の資源水準を反映していると考えられるので、漁獲量を検討することによって各魚種の資源の状態を判断することが可能であろう。

### 2-2. 漁獲量の

#### 季節変化

図4に昭和54～57年の和船巾着網漁獲量の季節変化を示してある。これを見ると、近年では3～7月の春漁と11～12月の秋漁というように漁獲のピークが2つに分かれている。

昭和54～57年では春漁で年間漁獲量の70%以上が漁獲され、3～5月の漁模様が良ければ好漁感が持たれるが、逆であると秋漁が好漁であっても不漁感はまだがれない。昭和57年は1～5月にかけてマイワシの好漁（後述）で過去4年間の最高の漁獲量を示した。秋漁においてもマイ

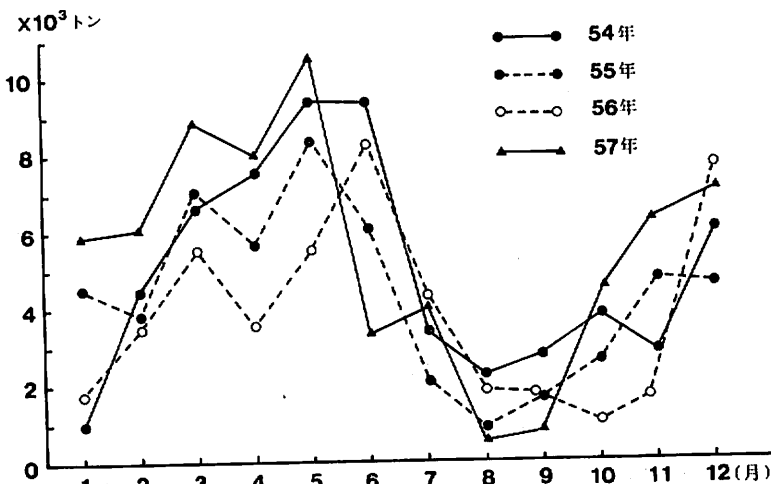


図4. 昭和54～57年の和船巾着網の月別漁獲量

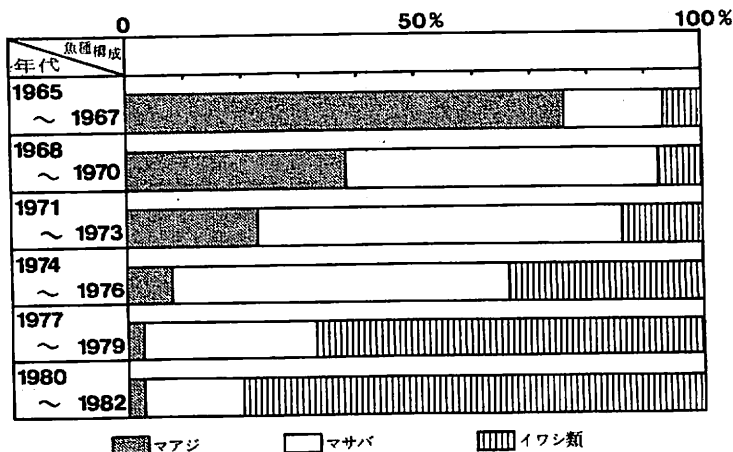


図5. 浜田港における巾着網漁獲量魚種構成の経年変化

ワシの好漁が影響し、やはり過去4年間の最高漁獲量を示している。

### 2-3. 魚種構成の経年変化

図5に巾着網漁獲量の魚種構成の経年変化を示す。昭和40~45年頃までは漁獲の主体がマアジ、昭和45~51年頃までがマサバ、昭和52年以降現在までマイワシであることがわかる。この現象は各魚種の資源水準の高低を示していると考えられ、現在はマイワシの時代といえる。

### 2-4. 魚種別漁獲量の季節変化

図6~9に、マアジ、マサバ、マイワシ、ウルメイワシの漁獲量の季節変化を示す。

マアジは4~5月と9~10月に好漁される機会が多かったが、昭和57年には5~7月と9月にまとまった漁獲がみられた。特に5~7月は2~3才魚主体の漁獲で過去4年間ではみられなかった現象である。漁獲の規模がマサバ、マイワシと比較して小さいため、この現象を資源回復に結びつけることは大胆すぎる

が、今後の動向が注目される。

マサバは4~6月の産卵群の漁獲、11~12月の越冬群の漁獲というのが近年のパターンである。昭和54~57年では昭和54年を除いて春漁の漁獲が少なく、資源水準の低下を示しているものと考えられる。近年マサバ漁は不振であることが特徴である。

マイワシはマサバとは対象的に春漁、秋漁とも好調である。漁獲のパターンは大まかにはマサバと一致する。マイワシの場合は12~4月の大羽イワシ(2~4月に産卵群)5~6月の中羽イワシ、

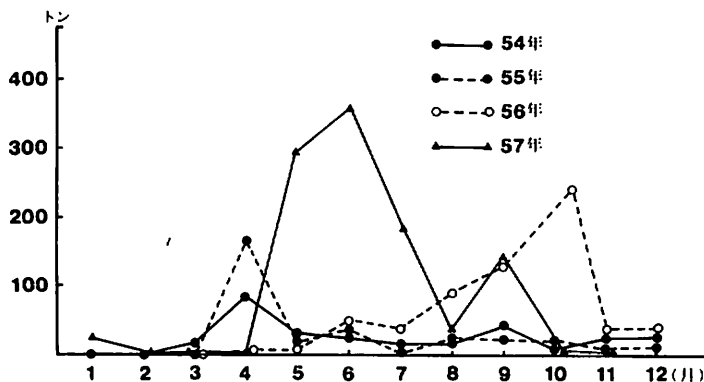


図6. マアジ漁獲量の季節変化

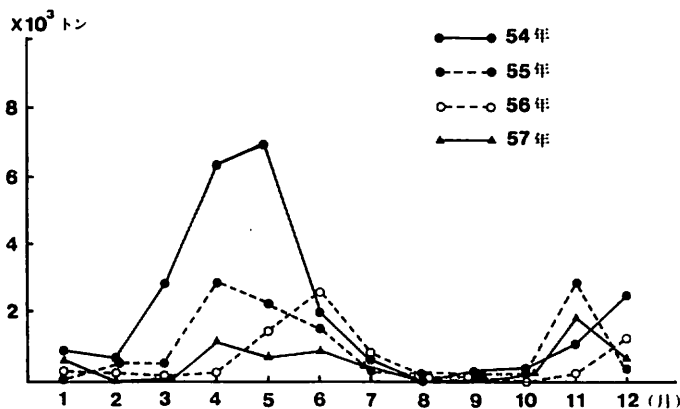


図7. マサバ漁獲量の季節変化

7～11月の小羽イワシ、に魚体を分けることができる。量的には5～6月の中羽イワシの漁獲が多いが、近年では2～4月の大羽イワシ（2年魚）の漁獲も急激に増加してきた。昭和57年は3月に産卵群が漁獲され、4～6月に中羽イワシが漁獲された後、57年生まれの小羽イワシが8月から漁獲され、10～11月にそれら小羽イワシが好漁された。57年生まれの資源水準の高いことが考えられ、56年とは異なった様子を示した。

ウルメイワシは例年5～7月に大、中羽ウルメイワシが漁獲されるが、57年は5～6月の漁獲がみられず、7月に例年の4倍近い大羽ウルメイワシが漁獲された。以後、11～12月に小羽ウルメイワシが漁獲されたのが特

徴である。ウルメイワシの資源水準は他の浮魚に比較して低く、安定しているといわれており、総漁獲量は、近年変動が小さい。例年、月間の漁獲量変動が大きいのが、57年は7月と12月に集中して漁獲されたのが特徴的である。

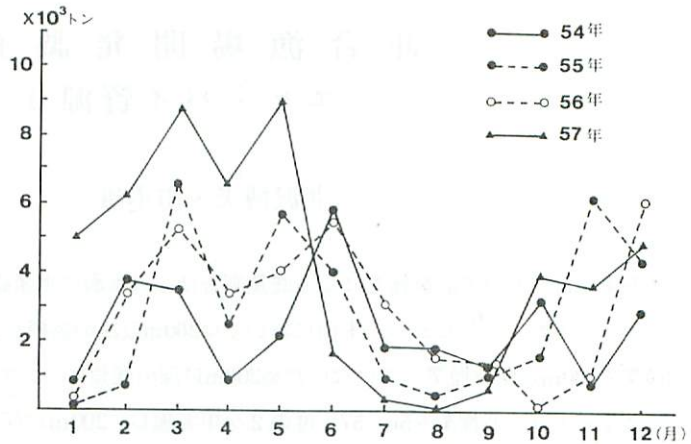


図8. マイワシ漁獲量の季節変化

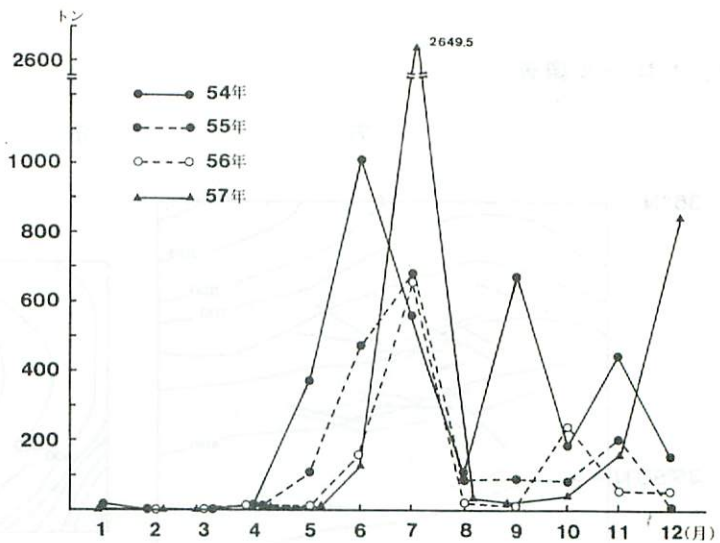


図9. ウルメイワシ漁獲量の季節変化